報告書

熊本市立桜木中学校　３年　岩﨑　小蒔

ピロリンピロリン、
「最近地震多いね」
スクリーンに表示された震源地や震度を伝えるテロップを眺め、珈琲片手に呟けば「んー…」、と後ろから気怠けな声が聞こえてくる。
クッションに寝そべり、最近ハマっているらしい育成ゲームをしながらの適当な相槌には興味がないことが滲み出ていた。
此方を一瞥もせず遊ぶ姿に、私も特に返事を欲していたわけでもないしと大して気に留めず、流石地震大国と呼ばれるだけはあると湯呑みを啜った。
今を生きる若人たちのそのまた曽祖父母が若人であった頃に流行りだした感染ウィルス。その発生から今年で百年の年月が経ち、近年ようやっと収拾がついた。人々はほっと胸を撫で下ろし、マスク生活に別れを告げた。
まぁどうだろう。驚異的な感染を見せるウィルスと最近高頻度で起こっている地震。比べても地震の方が大したことのないように感じるが…実際そんなに易しいものではない。一説には巨大地震により彼の幻の大陸は水没、終には滅亡したと云うほど。
閑話休題。
回りくどく前置いたがつまり何が言いたいかというと最近自然が、勢いをあげて哺乳類霊長目ヒト科を侵し始めているということだ。
地象災害に気象災害、病原微生物の三つを筆頭に、自然が土地や人の命そのものを轟かし、波紋は地球を覆うように広がっている。人類滅亡もあながち妄想の中だけに収まらず、さすればこの星は再び植物たちの楽園と還るだろう。
これまでの災害たちはすべての自然による、地球を巻き込む大規模な復讐劇のはじまりの狼煙なのだ。
しかしそもそも先に地球を侵し始めたのは一体どちらだったのだろう。私にはなんとも判定し難い。
森林伐採、海洋汚染、砂漠化、地球温暖化。どれもかれも人間が暮らしを便利にするために犠牲にしたものたち。
人は地に足をつけ地球の源に引き寄せられそこに位置する。知恵がついたのも祖のイヴとアダムが地に愛されて実った林檎を口にしたからだった。
この通り自然によって力をもらい見守られ生かされてきた人類が、母であり父である自然を拒み自身らが発展する道を選んだことによって彼らが犠牲となった。
そして今に至る。
こうした自然災害を背景に、ここぞとばかりに声を上げたのが古の神を信仰する一人の教祖だった。人類が好き勝手に自然を作り替えたために神々は怒っておられる、愚かな我々を

神聖なる方々は蔑まれているのだ、と。
教祖の言葉にのせられた大衆が古代の戦法に添って神々に縋り創めたのはなんとも自然な流れといえる。人柱を立てたり、一族総出で祭ってみたりと騒動はやがて世界に及び…
「ハァ。」
嘆息し、眉を下げる。ブルーライトを浴び過ぎた目に、瞬きで水分を送らせる。ふと顔を上げればすぐ横の神棚の供物が目に入る。
手を伸ばして一つの果実をとる。ぺりりと綺麗に包装されている和紙を裂き、菖蒲色に熟れた一粒を口に入れる。
今が旬なのだろうか、甘く酸味が効いて美味しい。ごくりと喉を上下させ、もう一粒と手をのばす。
葡萄を千切ろうと手に取ったとき、じわじわと炙れんばかりの視線を感じ振り返る。
「…遊びは終わったの？」
ゲームに耽っていたはずの食いしん坊がこちらを窺っていた。クッションもとい卿雲に乗っかり、ふよふよと空間を移動する様はまるで怠惰の化身そのもの。食いしん坊は作業を中断させ、その双眸で葡萄を捉えていた。食べ物に目がない気性、葡萄の甘い匂いに釣られたのだろう。
「それ美味しい？　一粒頂戴。」
質問には応えずに変わらず私の手中の果実に熱烈な視線を送る。
言うと思ってましたよと葡萄をもぎり、食いしん坊にはまだ足りないだろうと、もう数粒加え渡したところで、再度問うてみる。
「暇つぶしは楽しいかい。」
葡萄の皮を丁寧にむき、そのおかげでべたべたになってしまった手を近くにあった真榊で拭う。
「うーん…こっちがどんなに手を打っても思うようにはいかないよ。やっぱりこのまま終末かなぁ」
スカした表情で肩を竦ませ、もっとちょうだいと掌を差し出される。
深刻で大きな事案に対し彼奴が無邪気なことに関しては、数千年も前から承知済みである。今更うんざりだなんてしようもない。

さて、ここで一つ訂正を入れる。
神は人類に試練を与えているわけでも、否、与えて罰を受けさせたいわけでもない。
気付いてないだろうが、人類から神に試練を与えられる方へと向かい、わざわざ自らの身を自らで滅ぼしているのだ。

「美味しいかい、イザナギ。」
「きみもお食べよ、イザナミ。」

何故なら神はこんなに暇であるのだから。